

変わりゆく日本語と日本語教育の今

鈴木 睦
大阪大学

要 旨

言語教育というものは、教育的な効果に配慮しつつ、絶えず変化する目標言語を追いかけるといふ宿命を背負っている。現代日本語の変化は、1) 言語形式に関わる日本語の変化、2) 言語に対する意識の変化、3) 生活様式の変化（e-mail、携帯、ネット環境等）がもたらす日本語の変化の三つに分けられる。

日本語教育においては、1) 言語形式に関わる日本語の変化、つまり文法の変化よりも、2) 言語に対する意識の変化と、3) 生活様式の変化がもたらす日本語の変化が与える影響の方が大きい。1) は、文型の選択と文法解説のありように影響し言語能力の養成に関わる。2) は、適切性判断に影響を与え、社会言語学的能力の養成に関わる。3) の携帯電話やネット環境等の社会変化は、提示する会話文の状況設定、会話の展開、扱うべきコミュニケーション上の機能など広範囲に影響を与える。

1. はじめに

本稿は、CAJLE創立二十周年大会（2008年8月15日～17日、トロント）において、「変わりゆく日本語と日本語教育の今」と題して行われたパネルディスカッションの発表原稿に加筆修正を加えたものである。

言語教育というものは、教育的な効果に配慮しつつ、たえず変化する目標言語を追いかけるといふ宿命にある。「変わりゆく日本語と日本語教育の今」というテーマは、文法、語彙、音声だけでなく、会話の展開、言語行動等に関わる非常に大きなものであるが、本稿では日本語の変化が日本語教育にどのような影響を与えるか、またどのように取り入れられるべきであるかを考える。パネルディスカッションにおいて、待遇表現の変化に

については川口義一氏、メディアに現れる感覚的な造語や表記については嘉数勝美氏、海外から見た日本語と日本語教育の変化については室屋春光氏が扱っておられるので、本稿では、教育内容に直結する日本語の変化を中心に扱う。

2. 日本語の変化と日本語教育

日本語の教科書は一度出版されると大きく改定されることなく長期に渡って使用されることが多い。教科書における日本語は、長期の使用に耐え、かつ、現実で使用されている日本語と大きく乖離しないことが必要である。しかし、日本の社会で現実で使用されているものであっても、学習者が不利益を被ることのないように、日本語を使用する社会に存在する規範意識と大きく離れるものの採用は避ける必要がある。

日本語教育にとって、「変化する日本語をいつ、どのように日本語教育に取り入れていくのか？」は、大きな課題である。日本語学習者にとって、重要な日本語の変化とは、いったいどのようなものだろうか。日本語の変化には、様々な層があるが、日本語教育の立場からは、言語運用能力の養成に関わる以下の三種に分けて考えてみるとわかりやすい（図1）。

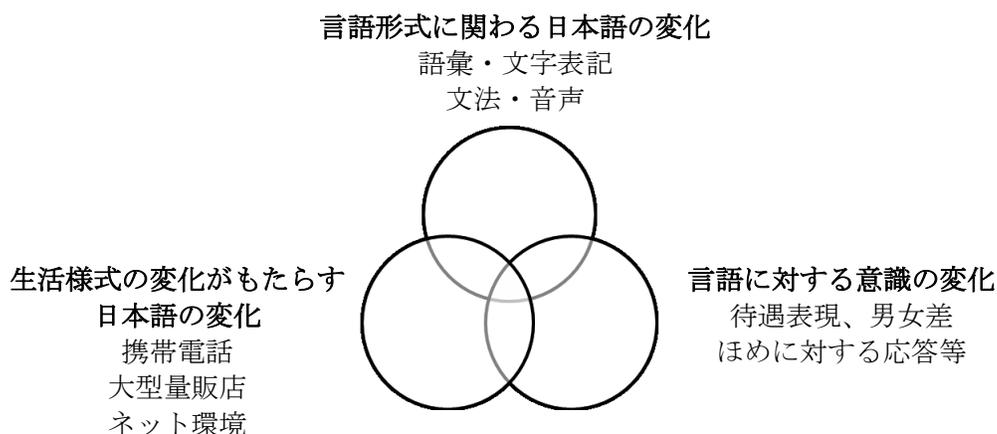


図1 日本語の変化

- 1) 言語形式に関わる日本語の変化
- 2) 言語に対する意識の変化
- 3) 生活様式の変化がもたらす日本語の変化

1) 言語形式に関わる日本語の変化の中心は、文法の変化である。文法の変化は、どのような文型を提示し、どのような文法説明を行うかという言語能力の養成に関わる。2) 言語に対する意識の変化は、待遇表現、男女差に対する意識など広く日本語の変化に関わるものと、品物の贈答に際して何を言うのか、ほめに対してどのように応答するのかという言語行動に影響を及ぼし、機能シラバスをどのように授業で扱うかに関わるものがある。これらは、いずれも、適切性の問題に関わる。3) 生活様式の変化がもたらす日本語の変化には、携帯電話やe-mail、スーパー形式の店舗の普及等があり、教材や教室作業においてどのような場面・状況を扱うかに関わる。

もっとも、この三つは互いに関連した重層的なものであり、具体的な場面・状況の中で、機能やディスコースが扱われ、その具体的な形として文型が使われるということになる。

2.1 言語形式に関わる日本語の変化

日本語の変化や「揺れ」については、多くの書籍（城生1992、北原2004、野口2004、諏訪2006、田中2007等）が出版されている。その中で指摘され、日常よく観察される変化を挙げると以下ようになる（作例筆者）。

- 1) い抜き言葉 「今考えてるところ」
- 2) ら抜き言葉 「納豆は食べれます」
- 3) 「を」の多用 「あの人を好きです」「ひらがなを読めます」
「ビールを飲みたいです」「勉強をがんばります」
- 4) 全然…ない 「全然だいじょうぶです」

- 5) 「ません」から「ないです」への移行
- 6) さ入れ言葉 「作らせていただきます」

以上のような変化については、日本語教育において既に対処されているものも含まれているが、1) ～6) について簡単に説明しておく。

1) い抜き言葉：

動詞の**te-form**に補助動詞のついた「V-ている」から、「い」が落ちるもので、日本語の教科書の会話文にもすでに使用されている。

2) ら抜き言葉：

一段動詞とカ変動詞の可能形である「V-られる」が「見れる」「食べれる」「来れる」となるもので、「ら抜き言葉」「ら抜き表現」と呼ばれる。一段動詞の受身形、敬語として使われる形との区別が合理的になされる利点があり、すでに雑誌等の書き言葉においても使用されるようになってきている。

3) 「を」の多用：

日本語教育の「～は～が好き/嫌いです」「～がVたいです」の文型では、「が」が使われているが、「を」を使用することも増えている。また、「頑張って勉強します」ではなく、「勉強を頑張ります」などもよく耳にするようになってきている。

4) 否定の「ない」と呼応する副詞類：

「全然だいじょうぶ」のように、現在の話し言葉の中では肯定表現とともに用いられることもある。

5) 「ません」から「ないです」への移行：

「今日は暑くないです」「昨日は暑くなかったです」など、終助詞等を伴わないイ形容詞の**nai-form**に「です」をつけて言い切る形は、日本語として落ち着きが悪いと言われながらも、日本語教育では早くから

採用されてきた。しかし、現在ではイ形容詞文、ナ形容詞文、名詞文、動詞文の全てに「ありません」と「ないです」の両方が使用され、使い分けがあることも指摘されている。

6) さ入れ言葉：

「Vさせていただきます」の文の場合に、一段動詞は「食べさせて」の形になり、五段動詞の場合には「書かせて」の形になるが、五段動詞にも余分な「さ」が入る現象である。

1) ～6) 以外に、「花に水をあげる」「人参は細かく切ってあげてください」「自分をほめてあげたい」に示されるような「Vてあげる」の用法の変化なども観察されている。

言語形式に関わる日本語の変化を日本語教育に取り入れるかどうかを考える場合には、話し言葉だけでなく文章表現に使用されるかどうかを指標となる。1) ～6) の変化は、教室では話し言葉と書き言葉の文体の差として説明することが有効である。文字を媒体にしたものであっても、親しい友人宛のe-mailや携帯メールなどは、話し言葉に近く、音声を媒体にしたものであっても講演などは書き言葉に近いものであるから、誤解を避けるためにはフォーマリティの違いと説明した方がわかりやすい。言語形式に関わる日本語の変化の三つの段階は、以下のように示すことができる。

第一段階 日常の話し言葉において使用される

第二段階 雑誌等の文章表現でも使用される

第三段階 論文等の硬い文章表現でも使用される

雑誌等の文章に現れるということは、話し言葉だけでなく書き言葉においてもかなり定着が進んでいると考えられるから、学習者が接触する可能性が高い変化であるということが出来る。また、同じ文字媒体であっても、論文のような硬い文体に現れるかどうかというのが次の指標となる。

例えば、「ら抜き」は、雑誌の記事等にも使用され、現在かなり広範囲に使用されており、今後も更に使用が進むと予測されるが、論文などの硬い書き言葉の中に現れるとまだ文体との不整合が感じられるから、1)～6)の変化の中で、第三段階に至っているものはまだないと言える。

また、同じ第一段階にあると考えられるものであっても「い抜き言葉」と「さ入れ言葉」の間には、大きな差がある。「い抜き言葉」はすでに話し言葉の中で定着しており、日本語教科書の会話文にも取り入れられているが、「さ入れ言葉」は「耳にすることがある」という程度に留まっている。

以上のような違いを踏まえて、教育現場でどのように対処することがよいのだろうか。教育現場では、学習者の理解と使用という二つの側面と組み合わせて取り入れていくことになる。第一段階としては、理解することが必要であり、第二段階としては、学習者自身が使用する練習が必要となる。このような視点からみれば、「1) い抜きことば」は理解も使用も必要な項目であり、2)～5)は、は現段階では理解することが必須である項目ということになる。6)については、現時点ではまだ取り上げる必要がない。

2.2 言語に対する意識の変化

言語に対する意識の変化は、言語形式そのものには変化がないが、使用する人々の感じ方や規範が変化したものであり、社会言語学的能力の養成に関わる。待遇表現については、コンビニ敬語と呼ばれるようなものも観察されているが、ここでは、言語に対する規範意識の変化の例として男女差を、また意識の変化によって言語行動そのものが変わる例としてほめに関する応答を挙げておく。

2.2.1 男女差に対する意識の変化

鈴木（1989, 1993, 2007）では、女性の発話として使いにくいものとして a～e を挙げ、発話行為論の立場から論じた。

- a. 動詞・補助動詞の命令形、禁止の「な」
- b. 文末の疑問を表す助詞「か」「かい」「だい」
- c. 話し手の意志を表す助動詞「う・よう」「まい」
- d. 話し手の推量を表す助動詞「だろう」「まい」
- e. 断定の助動詞「だ」

この指摘自体は、2010年となった現在でも変化していないと考えている。例えば、A「明日よ」、B「明日だよ」という二つの言語形式を比較した場合に、Aの方が女性的であり、Bが男性的であると感じられるという点には変化がない。しかし、実際に女性がどのような言語形式を使用し、それに対して女性の発話として適切であるかどうかを判断する基準は大きな変化が起きている（日本語ジェンダー学会 2006）。むしろ、1990年以前から、「～だよ」等を用いる女性は存在しており、地域差やその表現を使用する女性の年齢によっても適切性判断は異なっていたと考えられるが、「女性語」と呼ばれるものがどのようなものであるのかについてはある種の規範意識が共同の幻想として存在していたと言える。しかし、現在では従来男性的な表現とされていたものを取り込む形で女性の使う言葉のバリエーションは拡大の方向にある。陣内（1998: 52）は、「その変化は表面的には女性語の男性語化として捉えられているようですが、実際には「女性語の多様化」と見るほうがより適切だと思われます。」と述べている。

女性がいわゆる男性的な言語形式を使ったときに、聞き手がどのように感じるかが大きく変わったと言えるだろう。感じ方には世代間の差があるだけでなく、同じ人間であっても年月とともに感じ方は変化していく。筆

者自身の感覚を内省してみても、前掲の論文を執筆した1990年当時には、若い女性が「さん」をつけずに「鈴木、元気？」のように姓だけで呼びかけたり、「昨日、鈴木と会ったんだけど」のように人を指したりすることには「乱暴な言葉遣い」「男性的な人物」という印象を持っていたが、2010年の現在では若い女性の言葉遣いとして特に乱暴であるとは感じなくなっている。

このような変化に対して日本語教育がどのような対処を行うことができるのかは、なかなか困難な問題である。理解と使用に分けて考えるなら、理解については以下の対処が考えられる。

いずれの場合も、会話の教育の教材においては、音声を文字化して表記すると、音調等の重要な要素が示されず、実際と異なる印象を読み手に与えることになるため、できるだけ音声・映像とともに紹介することが望ましい。

- 1) 教科書等の会話文中の女性の発話を女性的な言語形式から中立的な言語形式を使用したものへと変更し、現実に日本で使われている学習者の年齢層に近い女性の発話に近づける。
- 2) 日本語のバリエーションとして、女性的な発話、男性的な発話を紹介し、その特徴を示す。
- 3) 小説やテレビのドラマ等に現れるいわゆる女性語に関する知識が中級以降の学習者に対しては必要となる。

使用に関しては、更に複雑な問題が絡む。男女差が問題になるのは主に普通体の会話であるので、学習者が丁寧体で話している間は大きな問題が生じない。普通体で話す場合には、学習者自身がどのような話し方をしたのか、自分自身をどのような人物として表現したいのかが重要になってくる。金水（2003）では、アニメやマンガ、小説等の登場人物のキャラク

ターを典型的に表す言葉遣いを「役割語」と呼び、博士語等のステレオタイプ化された話し方とそのイメージについて論じられているが、役割語に限らず、どのような場合でも、どのような話し方をするかが聞き手が抱く話し手のイメージに影響するという点では同じであり、日本語学習者がどのような日本語を話す必要があるのかという問題に関わってくる。

学習者が日本語を職場や学校で使用する必要がどの程度あるのか、そこではどのような日本語が話されているのか、学習者自身が自分自身をどのようなイメージでとらえているのかが、日本語のバリエーションの選択に関わることになる。場合によっては、方言で話される普通体の会話の方が重要になってくるかもしれない。学習者が外国語としてだけ日本語を学んでいた時代とは異なり、職場や学校で生活に必要な言語として学ぶ学習者が出現した時点で、今までとは異なる配慮が必要となってきたとすることができるだろう。

2.2.2 言語行動の変化

言語に対する意識の変化の例として、男女差以外に言語行動に関わる例を挙げておきたい。機能シラバスを中心とした教育は、コミュニケーションを中心とした日本語教育では常道となっている。しかし、これまで日本的な特徴として捉えられてきた「何もございませんが、召し上がって下さい」「つまらない物ですが」のような謙遜の例などは、日本社会における言語行動そのものの変化を考えると以前ほど重要でなくなっている。このことは、生活様式の変化とも関連しており、このような言語形式が適切な場面そのものが日常生活において減少しているのかもしれない。お中元、お歳暮といった贈答の習慣も簡素化し、デパートから直接内装される場合が多く、お宅を訪問して直接手渡すということは少なくなっている。

その他にも、ほめに対する応答などの変化が目立つ。「A: 日本語が上手ですね」「B: いいえ、まだまだです」というような決まり切った応

答も時代に合わなくなってきた。「愚妻」「豚児」といった語彙も死語になりつつあり、家族をほめられた場合などにも、感謝表現を使うだけでも十分である。言語行動の対照研究も進み、日本語の特徴も次第に明らかになってきているが、日本語教育においては、それらの特徴を取り入れると共に、逆に日本語そのものが変化し、従来特徴とされてきたことが、以前ほど重要でなくなってきたという現象にも注意を払う必要がある。ここで例に挙げた「ほめに対する応答」なども、フォーマルな場面で行われるのか、ごく親しい間で行われるのかによっても大きく異なる。教科書では、フォーマルな場面が提示される傾向が強いが、ほめに感謝で答えるような場面を平行して提示するような工夫が必要であると言える。

2.3 生活様式の変化がもたらす日本語の変化

生活様式の変化は、教科書でどのような状況・場面を設定するかに関わる。手紙はe-mailや携帯メールに、固定電話は携帯へと生活様式は変化し、スーパー形式の店舗やカウンターで先に商品を買う飲食店も増えた。従来の教科書の定番であった切手を買うという場面の設定も時代に合わなくなっている。買う物も変わり、買い方も変わり、そこで学習者が話す必要がある内容も変わる。「カードは使えますか」「どこでチャージできますか」というような今までにない語彙や表現が必要になる。

従来の手紙の書き方の指導だけでなく、e-mailの指導も必要になっている。友人にe-mailや携帯メールを送る場合と、ある程度フォーマルなe-mailをよく知らない人に送る場合の違いなどをシラバスに組み込む必要が出てきている。現在でも、e-mailを使った海外からの連絡に「拝啓、敬具」を使う学習者も見受けられるが、今後は、補助教材だけでなく主教材においても、手紙の書き方とともにe-mailや携帯メールの書き方も扱うことが必要となる。

携帯電話の普及は、単にコミュニケーションの媒体が固定電話から携帯電話に変わっただけでなく、言語行動の様式そのものの変化をもたらした。電話は個人にかかり、相手の名前はディスプレイに表示されるから「もしもし」「〇〇さんですか」「はい、〇〇です」の部分は省かれる。友人との待ち合わせなども、おおよその時間と場所だけを決めておき、あとは近くまで行ってから「今、どこ？」ということになるか、家から「今から出る」という電話や携帯メールを送るということが起きる。行動そのもの手順も変わり、それにとともなう言語行動も変わるということが起きている。

職場においても、学校においても、電子辞書、ワープロ、パワーポイント、エクセルの使用は常識となり、作文教育のあり方、発表等の技能などアカデミック・ジャパニーズの内容にも変化を与えている。一般の日本語学習者もインターネット環境に広く接しており、アカデミック・ジャパニーズだけでなく、一般的な日本語教育（JGP）においても、早い段階からインターネットの使用を扱うことが求められる。現在でも既に、個々の教員や日本語教育機関が取り入れているが、今後は主教材のシラバスに組み込むことが考えられてよい。

生活様式の変化は、文法の変化が日本語そのものに対する局所的な影響を与えるのとは異なり、教科書や教室作業の中で扱われる場面・状況の変化をもたらす、使用される表現、語彙、さらには談話の展開にまで影響を与える。また、インターネット環境の普及は、JFL環境で学ぶ海外の日本語学習者に、教材以外の生の日本語と膨大な情報に触れる機会を増やしている。

3. まとめにかえて

本稿では、日本語の変化を、1) 言語形式に関わる日本語の変化、2) 言語に対する意識の変化、3) 生活様式の変化がもたらす日本語の変化の三つに分けて、どのように日本語教育に影響を与えるのか、どのように対応

する必要があるのかを考えてきた。日本語教育においては、1) 言語形式に関わる日本語の変化、つまり文法の変化よりも、2) 言語に対する意識の変化と、3) 生活様式の変化がもたらす日本語の変化が与える影響の方が大きい。これらは、提示する会話文の状況設定、会話の展開、扱うべきコミュニケーション上の機能など広範囲に影響を与える。また、同時に電子辞書、ワープロ、パワーポイント等が日本語教育にすでに導入され始めている。

カナダのようなJFL環境で学ぶ場合と日本国内のJSL環境で学ぶ場合には、生の日本語と接触する量が大きく異なるため、日本語の変化に対する対応にも違いが必要かも知れない。しかし、海外においても、インターネット環境の普及やビジターセッションなどを利用した日本語母語話者との接触も増えていることを考えると、JFLとJSL環境の違いも従来ほど大きなものではない。JFL環境の日本語教育においても、1) 日本語および日本について、日本国内の新しい情報を伝えること、2) 現実の日本社会の日本語に対する意識と大きく異なることが今後は更に必要となる。本稿では触れなかったが、若者語、外来語、時事的な語彙など、盛衰が激しいものについては、日本事情の一環として扱うのがよいと思う。

(追記)

パネルディスカッションでは、日本語の変化にはどのようなものがあるかを中心にお話ししたのだが、今回原稿として再構成してみると、それらの変化が日本語教育とどのように関わるかという点に重点が移ってしまった。パネルディスカッションでお話ししたこともなるべく漏らさないようにしたつもりだが、パネルディスカッションの続編として読んでいただければ幸いである。参考文献には、手に入りやすく、興味深く読んで頂けそうなものを選定し、若者語に関する文献（山口 2007、米川 1998）も付け

加えた。パネリストとしての発表と執筆の機会をお与え下さったCAJLEの皆様
に心より感謝を申し上げる。

参考文献

- 北原保雄編 (2004) 『問題な日本語』 大修館書店
- 金水敏 (2003) 『バーチャル日本語—役割語の謎—』 岩波書店
- 城生佰太郎 (1992) 『ことばの未来学—千年後を予測する』 講談社
- 陣内正敬 (1998) 『日本語の現在：揺れる言葉の正体を探る』 アルク
- 鈴木睦 (1989) 「いわゆる女性語における女性像」 『近代』 67, 1-17 神戸
大学「近代」発行会
- 鈴木睦 (1993) 「女性語の本質—丁寧さ、発話行為の視点から—」 『日本
語学 臨時増刊号 世界の女性語・日本の女性語』 148-155 明治書院
- 鈴木睦 (2007) 「言葉の男女差と日本語教育」 『日本語教育』 134, 48-57
日本語教育学会
- 諏訪春雄編 (2006) 『日本語の現在』 勉誠出版
- 田中章夫 (2007) 『揺れ動くニホン語』 東京堂出版
- 日本語ジェンダー学会 (2006) 『日本語とジェンダー』 佐々木瑞枝監修
ひつじ書房
- 野口恵子 (2004) 『かなり気がかりな日本語』 集英社
- 山口仲美 (2007) 『若者ことばに耳をすませば』 講談社
- 米川明彦 (1998) 『若者語を科学する』 明治書院